

上代日本語における接頭辞を前項とする「ウチー」

阿部 裕 (中部大学非常勤講師)

要旨

日本語の複合動詞には前項が接頭辞であるものが多く存在するが、それらの歴史的変遷はほとんど解明されていない。接頭辞型複合動詞の1つに「打つ」を前項とする「ウチー」がある。中古の「ウチー」については研究がある程度蓄積されているが、上代の「ウチー」についてはまとまった記述が見られない。本稿はその欠を補うため、上代における「ウチー」の様相を記述する。

「ウチー」は後項動詞の種類からⅠ類(ウチ+他動詞)、Ⅱ類(ウチ+意志的自動詞)、Ⅲ類(ウチ+非意志的自動詞)に分けられる。調査の結果、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類のすべてにおいて、前項「ウチ」が動詞としての機能を有している例と前項「ウチ」が接頭辞である例が併存していることが確認された。前項が接頭辞であると考えられる「ウチー」がⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の全てにおいて確認されたことなどから、「ウチー」は上代の時点で既に接頭辞型複合動詞として存在していたと結論することができる。

1 はじめに

複合動詞の発達は現代日本語の特色の一つであり、その歴史的な発達・変遷の過程の記述は、日本語史研究において重要な課題である。複合動詞には「トリ決める」「ウチ震える」「カキ口説く」のように前項が接頭辞的に機能するもの(以下、接頭辞型複合動詞)が存在するが、接頭辞型複合動詞の歴史的変遷には未解明の点が多い。

接頭辞型複合動詞が中古の王朝古典作品に多く使用されることは夙に指摘されてきた。一方、現代日本語では新たな接頭辞型複合動詞の生産は行われていない。とすれば、日本語史のいずれかの時点において接頭辞的複合動詞が盛んに生産・使用されるようになり、いずれかの時点で生産・使用が減少に転じたことになる。したがって、接頭辞型複合動詞の歴史を記述する上で必要であるのは、まず以下の(1)について明らかにすることである。

- (1) a.接頭辞型複合動詞はいつ・どのように成立し、いつ・どのように増加したのか。
- b.接頭辞型複合動詞はいつ・どのように減少したのか。

この点について明らかにするためには、それぞれの接頭辞型複合動詞の各時代における様相の記述を蓄積し、その変遷の概要を捉えなければならない。

以下では、(1a)に答えるための調査の一環として、上代日本語における「打つ」を前項とする「ウチー」を取り上げ、その様相を記述する。特に、前項が接頭辞である例に注目する。「ウチー」には前項が接頭辞化したものが多く存在することが知られている。特に中古の文芸作品に多くの用例があるため、中古の「ウチー」については研究の蓄積も少なくない。しかし、上代における「ウチー」の様相についてのまとまった記述は見られない。本稿はその欠を補うものと位置づけられる。

2 先行論

2.1 複合動詞史研究の現在

複合動詞史の研究はこれまでも蓄積されてきたが、その中でもっとも大きな問題は、金田一(1953)、吉澤(1952)以来続いてきた〈古代語における複合動詞の存否〉であろう。この問題について青木(2013)は「古代語には現代語と同じ振る舞いをする「複合動詞」もあれば、同じ形をとりながら「複合動詞」とは呼べない特徴を備えているものも認められる」(p.219)とする。論の詳細については青木(同)を参照されたいが、これによって古代語における複合動詞の存否の問題はひとまずの決着を見たといつてよいと思われる。しかし、特定の複合動詞の歴史の変遷に焦点を当てた記述的研究の蓄積は今日においても少ないままである。とすれば、日本語の複合動詞史を描く上で今後必要となってくるのは、個別の複合動詞の歴史の変遷の記述を蓄積し、青木(同)で描かれた複合動詞の歴史的变化の流れをより具体的かつ詳細なものにしていくことであろう。

2.2 「ウチー」の研究史

古代語の「ウチー」に関する主要な先行論として、阪倉(1983)、堀(1986)、関(1993)、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)、山王丸(2011)、阿部(2016)などがある。このうち、阪倉(1983)、関(1993)、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)は接頭辞「ウチ」の意味的機能についての検討を中心とする。阪倉(1983)、関(1993)を含め、「ウチ」の意味的機能の研究史は近藤(1996)に詳しくまとめられている。

さて、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)では中古の「ウチ」が「弱意」を表すことが主張されている。例えば、近藤(1997)では『源氏物語』中の「ウチ+他動詞」について、近藤(1998b)では『源氏物語』中の「ウチ+主体変化動詞」について、それぞれ具体例を挙げながら詳細に検討されており、次のように結論されている。

- (2) a. 「意志性・意図性の弱さ」(略)、「対象への働きかけの弱さ」(略)、「対象の受ける影響・変化の弱さ」(略)といったことが認められた。(近藤 1997:23)
- b. 中古、特に源氏物語の頃に関して言えば、「ウチ」は「弱意」の方向を基本としつつ、その具体的な意味は、下接の動詞によっていろいろな形で実現するというものではないかという見通しを、筆者は持つに至っている。(近藤 1997:24)
- (3) 「ウチ+主体変化動詞」の意味特徴としては次のようなことが認められた。
- ① 変化の結果の状態が軽度・可逆的である。(略)
 - ② 変化の結果の状態が一時的である。(略)
 - ③ 変化の前の状態が変化の後の状態に近い。(略)
 - ④ 話題の規模・スケールが小さい。(略)
- ①②を更にまとめて、「変化の前と変化の後の、変化の幅が小さい」ということもできるだろう。これらはいずれも「強意」の方向と言うよりは、「弱意」の方向と言うことができる。(近藤 1998b:154)

中古における接頭辞「ウチ」の意味については、近藤の挙げる「弱意」が現時点では最も首肯できる説明であると思われる。しかし、近藤も打撃を表す動詞「ウツ」から「弱意」

が生じるプロセスについては説明していない。また、(2) (3) は中古の「ウチ」についての結論であり、上代の「ウチ」の意味的機能についてはほとんど検討されていない。このように「ウチ」が「弱意」という機能を獲得するプロセスや、上代の「ウチ」がどのような意味を有していたのかについては、課題として残されている。

「ウチ」の接頭辞化に関して『源氏物語』を資料に考察した山王丸(2011)は、動詞「打つ」が形式化した接頭辞とされてきた「ウチ」の中に名詞「内」が含まれることを主張した。この中で山王丸は、『万葉集』中の「ウチ嘆く」や「ウチ見る」の前項が動詞「打つ」ではなく名詞「内」である可能性を指摘するが、これには疑問がある。『万葉集』における「ウチー」の前項の表記は、仮名書き例を除いた69例中「打」が63例を占め、「内」は1例のみである¹。動詞「ウツ」の単独例の表記も、仮名書き例を除いた10例中9例を「打」が占める。つまり、「ウチー」の前項と動詞「ウツ」の表記はほぼ同じである。これに対し、『萬葉集索引』(古典索引刊行会編2003)によれば、『万葉集』における名詞「内」の表記は仮名書き例を除けば全て「内」「中」「裏」のいずれかであり、「打」で表記される例は見られない。「ウチー」の前項の表記が名詞「内」ではなく動詞「ウツ」に一致することから、本稿では「ウチー」の前項「ウチ」は「内」ではなく「ウツ」の連用形と判断する。

堀(1986)は、「ウチ渡す」など従来前項が接頭辞であるとされてきた「ウチー」の前項にも接頭辞ではないものが存在することを主張する。その中で、上代の「ウチー」の前項「ウチ」に様々な意味のものが存在することが述べられており、以下のように「ウチ」の接頭辞化のプロセスにも触れられている。

- (4) これ(阿部注:「打つ」という具体的動作を表していた「打」)が祝詞の「打積置豆」「打置豆」のように次第に抽象化し、「宇知須々呂比」「打見」など手動とは直接関係のない他動詞にも応用され、さらには「宇知奈妣久」「打霧之」など自動詞にも使われるようになって形式化・一般化したのが、いわゆる接頭語「うち」である。(p.47)

「ウチ」の意味的機能については、「ただ後項の動詞を強調する程度の意味しかもない」(p.46)、「祝詞の諸例は、「うち」の意味が内面的に抽象化し始め、後項動詞が表わす他動行為の、その発動のきっかけともいうべき部分を表す程度にもなっている」(p.47)と述べる。「ウチー」の後項が〈手動的な他動詞→非手動的な他動詞→自動詞〉という流れで拡大していったという接頭辞化の過程は不自然なものではないが、堀はこの流れについて概略的に述べるにとどまり、「ウチ」が希薄化する具体的な理由など、接頭辞化のプロセスを合理的に説明するには至っていない。

このほか、「ウチー」以外の接頭辞型複合動詞(「トリー」「カキー」など)を扱った歴史的研究も存在する。関(1993)、村田・前川(2013)、阿部(2013)は中古を主な対象としており、上代の様相については詳しく触れられていない。上代を扱ったものとしては阿部(2011)がある。阿部(2011)は上代語に見られる「取る」を前項とする「トリー」を扱い、前項を接頭辞と見るべきものが複数存在すること、「政事を行う」「とりまとめる」といったような熟合的な意味に解釈すべき「トリ持つ」が存在することなどを主張した。

¹ 「韓衣君にウチ着せ(君尔内著)」(巻11・2682)。この例の前項「ウチ」が内側や内面を表すとは考えにくい。

以上のように、上代の接頭辞型複合動詞についての検討の蓄積は十分でなく、「トリー」以外についての上代における様相の記述が欠けている。本稿では「ウチー」の上代における様相を記述し、接頭辞的な例がどの程度見られるのか、阿部（2011）で扱われた「トリー」の様相とはどのように共通しどのように異なるのか、などについて述べる。

3 上代における「ウツ」の特徴

「ウチー」について検討する前に、前項となる動詞「ウツ」の上代における特徴を押さえておこう。『古事記』歌謡、『日本書紀』歌謡、『万葉集』から「ウツ」が単独で動詞として使用された例を採集したところ、記紀歌謡から計18例、『万葉集』から14例得られた。

上代の「ウツ」は他動詞としての用法が基本であるが、非意志的自動詞的に用いられていると思われる例も僅かに認められる。(5)～(8)は他動詞、(9)(10)は非意志的自動詞としての使用である。

- (5) 皆人を寝よとの鐘はウツなれど（打礼柺）君をし思へば寐ねかてぬかも
（万葉集・巻4・607・笠女郎）
- (6) 古に梁ウツ人の（梁打人乃）なかりせばここにもあらまし柘の枝はも
（万葉集・巻3・387・若宮年魚麻呂）
- (7) 馬ないたくウチてな行きそ（打莫行）日ならべて見ても我が行く志賀にあらなくに
（万葉集・巻3・263・刑部垂麻呂）
- (8) みつみつし久米の子が頭椎い石椎いもちウチてしやまむ（宇知豆斯夜麻牟）
（古事記・歌謡10）
- (9) 笹葉にウツや霰の（宇都夜阿良禮能）
（古事記・歌謡79）
- (10) 霰ウツ（霰打）安良礼松原住吉の弟日娘女と見れど飽かぬかも
（万葉集・巻1・65・長皇子）

(5)(6)(7)(8)はそれぞれ「叩く」「設置する」「鞭打つ」「倒す」意、(9)(10)は「打ちつける（ように降る）」意に解釈される²。このように、「ウツ」は様々な動作を表しうるが、その動作はいずれも「モノとモノとの強い接触」（以下、打撃）を伴う。単独の「ウツ」が打撃を伴わない動きを表す例は見られない。

以上より、「ウツ」は基本的には他動詞、稀に非意志的動詞として使用され、何らかの打撃を表すとまとめられる。したがって、「ウチー」の前項が接頭辞的であるかを判定する際には、打撃の意の有無が有効な基準になると思われる。打撃を伴わない「ウチー」の前項は打撃を表す動詞として機能しない接頭辞と認められる。一方、何らかの打撃を伴う動作に使用された「ウチー」は打撃の意を有していると判断する。

4 上代語の「ウチー」

4.1 概要

記紀歌謡と『万葉集』を調査したところ、「ウチー」は延べ語数で98例（『古事記』歌謡

² 記紀歌謡には(8)のような目的語が明示されない例が多いが、用法は「ウチてしやまむ」で固定的であり、文脈から動作対象は明らかである。

3例、『日本書紀』歌謡2例、『万葉集』93例)、異なり語数で36例得られた。それらを(11)として挙げる([]は用例数)。

- (11) ウチ出づ [3]、ウチ寄^よす [1]、ウチ置く [1]、ウチ掛く [2]、ウチ交ふ [1]、ウチ着^きす [1]、ウチ懲^こます [1]、ウチ霧^{きり}らす [1]、ウチ臥^ふい伏^ふす [1]、ウチ越^こゆ [7]、ウチさらす [2]、ウチしなふ [1]、ウチ偲^{おも}ふ [1]、ウチすすろふ [1]、ウチ付^つく (下二段活用) [1]、ウチ嘆^{なげ}く [5]、ウチ鳴^なす [1]、ウチ撫^なづ [1]、ウチ靡^なく [31]、ウチ濡^ぬらさゆ [1]、ウチ上^ある [1]、ウチ放^{はな}つ [1]、ウチはなふ [1]、ウチ羽^は振^はく [1]、ウチ延^のぶ [2]、ウチ嵌^はむ [1]、ウチ払^はふ [6]、ウチ降^ふる [3]、ウチ触^ふる [1]、ウチ見^みる [1]、ウチ廻^まる [1]、ウチ群^むる [2]、ウチ止^とむ [1]、ウチ行^いく [5]、ウチ寄^よす [1]、ウチ渡^わす [5]、ウチ折^をる [1]

さて、仮に上代日本語において既に接頭辞「ウチ」が存在していたとすれば、どのような動詞に前接するのだろうか。影山(1993)をはじめ、複合動詞の構成要素はしばしば他動詞、意志的自動詞(≒非能格自動詞)、非意志的自動詞(≒非対格自動詞)の3種類に分類されるが、「ウチー」の後項にはその全てが存在する。これを本稿では(12)のようにI類、II類、III類に分ける。

- (12) I類：ウチ+他動詞 II類：ウチ+意志的自動詞 III類：ウチ+非意志的自動詞

接頭辞「ウチ」を前項とする「ウチー」がどの類に見られるのかを調査することによって、上代における接頭辞「ウチ」のあり方の一端を明らかにすることができる。

4.2 I類の「ウチー」

「ウチ+他動詞」という構造であるI類の「ウチー」は、無助詞もしくはヲ格で表示される目的語を有する例が多い。前項が打撃を表すものだけでなく、接頭辞と考えられるものも存在する。以下、目的語を伴うものと伴わないものに分けて述べる。

4.2.1 目的語を伴うもの

次に挙げる「ウチー」は、打撃を伴いうる動作を表す動詞が後項となり、打撃の対象と考えて矛盾のない目的語を伴うことから、前項「ウチ」が打撃を表していると判断する。

- (13) 太秦は神とも神と聞こえる常世の神をウチ懲^こますも (宇知岐多麻須母)
(日本書紀・歌謡 112)
- (14) 時守のウチ鳴^なす鼓 (打鳴鼓) 数みみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し
(万葉集・巻 11・2641)
- (15) 千鳥鳴く佐保の川門の清き瀬を馬ウチ渡^わし (馬打和多思) いつか通はむ
(万葉集・巻 4・715・大伴家持)

これらはそれぞれ、前項に打撃の意を認めて(13)「常世の神を打って懲らしめる」、(14)

「打って鳴らす鼓」、(15)「馬を鞭打って渡らせる」と解釈できる。ただし、「[ウチ][懲ます]」「[ウチ][鳴らす]」「[ウチ][渡す]」というように2つの動詞が連続して使用されただけのものなのか、前項と後項が本来の意味を保持したまま一語化した「複合構造」(石井2007)の複合動詞であるのかの判定は難しい。

これに対し次の「ウチー」は、後項が打撃を伴う動きを表さず、目的語が打撃の対象とは考えにくい。かような「ウチー」の前項「ウチ」は、動詞としての機能を有さない接頭辞と見てよいと思われる。

(16) 堅塩をトリつづしろひ糟湯酒ウチすすろひて (宇知須々呂比呂)

(万葉集・巻5・892・山上憶良)

(17) 我が宿の冬木の上に降る雪を梅の花かとウチ見つるかも (打見都流香袋)

(万葉集・巻8・1645・巨勢宿奈麻呂)

(16)の後項「すすろふ」は「すする」意であり打撃を伴う動作ではないこと、「糟湯酒」が打撃の対象とは考えにくいことから、「ウチ」は接頭辞と判断できる。また、「トリつづしろひ」と「ウチすすろひて」が並列されている点も注目される。阿部(2011)によれば、上代の「トリ」にも接頭辞的用法が存する。接頭辞的前項を有する「トリー」「ウチー」を並列することにより、表現上の効果を狙った可能性がある。後の(19)(24)のように、「トリー」と「ウチー」が並列する例は他にも見られる³。

(17)も同様に、「見る」が打撃を伴う動作ではないこと、「雪」が打撃の対象とは考えにくいことから、「ウチ」を接頭辞と見ることができ。また「梅の花かと」を伴う点が注目される。「ウツ」がト格を伴う例は上代には見られないが、「見る」には次の例がある。

(18) 霍公鳥棟の枝に行きて居ば花は散らむな玉と見るまで (珠登見流麻泥)

(万葉集・巻17・3913・大伴家持)

この例から、「ウチ見る」の統語的特徴は「ウツ」ではなく「見る」に一致することが分かる。この事実も、「ウチ」が接頭辞であることの裏付けとなろう。

また、上代の「ウチ+他動詞」には無助詞もしくはヲ格で表示される目的語とニ格補語のいずれもを伴うものが存在する。

(19) ますらをの男さびすと劍太刀腰にトリ佩き (許志尔刀利波积) さつ弓を手握り持ちて赤駒に倭文鞍ウチ置き (志都久良宇知意伎) (万葉集・巻5・804・山上憶良)

これと同様に、阿部(2011)では上代の「トリー」に無助詞/ヲ格で表示される目的語とニ格補語を伴う「~(ヲ)~ニトリー」という構文が多く見られることが述べられている。

(19)はそのような「トリー」と「ウチー」が並ぶ例である。目的語、ニ格補語、接頭辞型複合動詞を並列することが、上代韻文における技巧的表現のようなものであった可能性

³ これらはいずれも山上憶良の歌であり、憶良が好んで用いた表現とも考えられる。

もあるだろう。

なお、後に触れる「ウチ私ふ」のように、前項が接頭辞であるのかの判定が難しいⅠ類の「ウチー」も存在する。

4.2.2 目的語を伴わないもの

Ⅰ類の「ウチー」には、以下のように目的語を伴わない例も見られる。

- (20) さわさわに汝が言へせこそウチ渡す (于知和多須) 彌木榮なす來入り參來れ
(日本書紀・歌謡 57)
- (21) もののふの八十伴の男のウチはへて (打經而) 思へりしくは (万葉集・巻 6・1047)

堀 (1986) は (20) の「ウチ渡す」の前項に「馬を鞭打つ」意を認めるが、目的語が表示されていないことから、打撃の意が希薄化している接頭辞と見ることも可能である⁴。当該例の「ウチ」の機能の判定は困難であり、本稿では保留する。

「ウチはふ」は 2 例確認されるが、いずれも「ウチはへて」形で副詞的に「思ふ」にかかり、「ずっと (思い続けてきた)」のように解釈される。「ウチはふ」は中古においても「ウチはへ」あるいは「ウチはへて」形で副詞的に使用される⁵。副詞的な用法が上代に既に定着していたと考えられる。「ウチ」が打撃を表すとは考えにくい、既に用法が固定的であるため、接頭辞か否かの判断は難しい。

4.3 Ⅱ類の「ウチー」

「ウチ+意志的自動詞」という構成であるⅡ類の「ウチー」も、Ⅰ類と同様に目的語を伴うものと伴わないものに大別される。また、目的語を伴わない例には移動動詞を後項とするものが際立って多いことも特徴である。

4.3.1 目的語を伴うもの

目的語を伴うⅡ類の「ウチー」は次のようなものである。

- (22) たまきはる命絶えぬれ立ち躍り足すり叫び伏し仰ぎ胸ウチ嘆き (武祢宇知奈氣吉)
手に持てる我が子飛ばしつ世間の道 (万葉集・巻 5・904)
- (23) ウチ靡く心もしのにそこをしもうら恋しみと思ふどち馬ウチ群れて (宇麻宇知牟礼
豆) 携はり出で立ち見れば (万葉集・巻 17・3993・大伴池主)
- (24) 玉梓の道の隈廻に草手折り柴トリ敷きて床じものウチ臥い伏して (宇知許伊布志提)
思ひつつ嘆き伏せらく (万葉集・巻 5・886・山上憶良)

(22) (23) は、前項「ウチ」がそれぞれ「胸」「馬」を目的語とする他動詞、後項「嘆

⁴ (20) の重複例として『古事記』歌謡 63 番がある。(20) の「ウチ」に「馬を鞭打つ」意を認めるならば「(彌木榮を) 馬を鞭打つて渡す」などと解釈される。「ウチ」に「馬を鞭打つ」意を認めない場合は、「見渡す」意と解釈される (日本古典文学大系『古代歌謡集』岩波書店)。

⁵ 「いとど御心地もあやまりて、ウチはへ臥しわづらひたまふ」(源氏物語・真木柱) など。

く」「群る」が「作者」「思ふどち」を主体とする意志的自動詞として機能しており、いずれも「胸を打って嘆く」「馬を鞭打って集まる」という2つの動作を表している。かような「ウチー」は前項と後項がそれぞれに動詞として機能しており、複合動詞ではない。

(24)「ウチ臥い伏す」は、後述する「ウチ靡く」と同様に人が横になる動作の描写に用いられている。前項「ウチ」は接頭辞の可能性も高いと思われるが、(25)のように「床」を目的語とする「ウチ払ふ」が見られることに鑑みると、「床じもの」(「床のようなもの」の意か)に対する打撃を表すという解釈も捨てることはできない。

(25) 夕されば床ウチ払ひ (登許宇知波良比) ぬばたまの黒髪敷きて

(万葉集・巻17・3962・大伴家持)

「ウチ払ふ」は『万葉集』に6例確認され、そのうち5例が「床」あるいは「玉床」を目的語とする。「ウチ払ふ」はI類の「ウチ+他動詞」であるが、前項「ウチ」が「床」に対する打撃を表しているのか、あるいは単に払う意で用いられているのか、定かではない。

「床」を払う際には軽度の接触を伴うが、「ウチ」がその接触を表しているのかを判断できないためである。しかし、仮に「ウチ払ふ」の「ウチ」が「床」に対する打撃を表しているとすれば、同様に(24)の「ウチ」が「床じもの」に対する打撃を表しているという解釈も可能となるだろう。

4.3.2 目的語を伴わないもの

次に挙げる「ウチー」は打撃の対象となる目的語が存在しないことから、「ウチ」は接頭辞と考えられる。

(26) 昼暮らし夜わたし聞けど聞くごとに心つごきてウチ嘆き (宇知奈氣伎) あはれの鳥
と言はぬ時なし

(万葉集・巻18・4089・大伴家持)

(27) 安騎の野に宿る旅人ウチ靡き (打靡) 寐も寝らめやも古思ふに

(万葉集・巻1・46・柿本人麻呂)

「ウチ嘆く」には(22)として挙げた「胸ウチ嘆き」の例があることから、堀(1986)は(26)のような目的語の存在しない「ウチ嘆く」も「胸を打つ」意である可能性を指摘する。しかし、両者には明らかな文脈の違いが存する。(22)は幼い子供が死んだ悲しみを述べる歌であり、その強い嘆きを表すために「胸ウチ嘆き」という表現を用いたものとされる⁶。これに対し、(26)の「ウチ嘆く」はホトトギスの渡来を詠んだ歌であり、強い悲しみによって嘆く歌ではないため、「ウチ」に「胸」という補語を想定するのは困難であ

⁶ 伊藤(1996)は、(22)を山上憶良の作とした上で、「人が死んだ時、嘆き悲しみながら復活のための所作を振る舞うのは、古代人の習いであった」(p.259)、「仁徳即位前紀に、弟の菟道若郎子が息絶えた時、兄の大鷦鷯尊が、我が胸を打ち、叫び嘆き、ついに髪を解き屍に跨って弟をいくたびか呼び、その命を活かしたという話がある」(p.260)、『礼記』檀弓下に「辟踊ハ哀ノ至リナリ」という言葉がある。「辟」は胸を打ち、「踊」は足踏みして悲しむ動作である。(略)「胸打ち嘆き」も「辟」と関係することは容易に考えられ」(同)ると述べ、「憶良は、漢籍における死の悲哀を示す表現を踏まえながらも、仁徳即位前紀と同様、日本伝統の魂振りを色濃くこめてこの表現をなしたものと見るべきであろう」(同)と述べる。

る。したがってこの「ウチ」には打撃の対象が存在せず、接頭辞と判断する。

(27)は「ウチ靡き」が人の横になる様子を表している。目的語が存在せず、打撃を伴う動作ではない点から、「ウチ」は接頭辞と判断できる。なお、「ウチ靡く」は上代で最も多くの用例(31例)が存する「ウチー」であるが、人が横になる意を表すⅡ類は5例と少なく、Ⅲ類に分類される非意志的な例が26例を占める。

4.3.3 移動動詞を後項とするもの

目的語を伴わないⅡ類の「ウチー」には、後項の意志的自動詞が移動動詞であるものが多く、「ウチ越ゆ」「ウチ出づ」「ウチ行く」「ウチ上る」「ウチ廻る」が確認できる。この種の「ウチ+移動動詞」は、目的語が存在せず、無助詞やヲ格などで表示される移動の経路や起点を補語とすることが多い。

- (28) 白雲の龍田の山の露霜に色づく時にウチ越えて(打超而)旅行く君は
(万葉集・巻6 971・高橋虫麻呂)
- (29) 塩津山ウチ越え行けば(打越去者)我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも
(万葉集・巻3・365・笠金村)
- (30) 浜辺より我がウチ行かば(和我宇知由可波)海辺より迎へも来ぬか海人の釣舟
(万葉集・巻18・4044・大伴家持)
- (31) 逢坂をウチ出でて見れば(打出而見者)近江の海白木綿花に波立ちわたる
(万葉集・巻13・3238)
- (32) ウチ上る(打上)佐保の川原の青柳は今春へとなりけるかも
(万葉集・巻8・1433・坂上郎女)
- (33) 汝こそは男にいませばウチ廻る(宇知微流)島の埼々かき廻る磯の埼落ちず
(古事記・歌謡5)

「ウチ+移動動詞」には打撃の対象となる目的語が存在しないことから、前項「ウチ」は接頭辞であるように見える。しかし、堀(1986)はこれらの「ウチ」について、「馬を鞭打つ意」を表しており接頭辞ではないとする。これは見逃せない指摘であろう。

『万葉集』の「ウチ越ゆ」は7例中3例が(29)のように同歌中に「馬」を伴う。一方、単独使用の「越ゆ」は『万葉集』中に73例見られるものの、移動手段としての「馬」を同歌中に伴う例は見られない⁷。この事実から、「ウチ越ゆ」は「越ゆ」と異なり「馬」と何らかの強い関係を有することが伺える。この関係こそ、堀(1986)の指摘する「馬を鞭打つ」意ではないだろうか。(7)のように単独の「ウツ」に「馬」を目的語とする例があることから、「ウチ」を「鞭打つ」意と解することには合理性がある。文献に残る僅かな用例からでは断定できないが、「ウチ越ゆ」は本来的には「馬ウチ越ゆ」(馬を鞭打ちながら越える)という用法であったと考えられる。

しかし、実際には「馬」を目的語とする「馬ウチ越ゆ」は見られない。これは『万葉集』における「ウチ越ゆ」が補語としての「馬」を必要としなかったことを示すのではないだ

⁷ 馬を主体とする「赤駒の越ゆる馬柵の(越馬柵乃)」(万葉集・巻4・530)や、長歌中に「越ゆ」とは無関係に「馬」が現れる例(万葉集・巻19・4154)は見られる。

ろうか。その理由は定かではないが、「ウチ越ゆ」の目的語が「馬」であることが当時の話者にとって自明であったためかもしれない。いずれにせよ、『万葉集』の「ウチ越ゆ」には目的語が存在しないが、「ウチ越ゆ」は本来的には「馬」を目的語としていたと推測される。

さて、『万葉集』における「ウチ越ゆ」は、目的語が存在せず全体で自動詞として用いられていることから、「[ウチ][越ゆ]」という2つの動詞ではなく、「馬で越えること」を表す「[ウチ越ゆ]」という複合動詞であったと考えられる。「馬ウチ越ゆ」という形式が全く見られないことから、かような複合動詞「ウチ越ゆ」においては、前項「ウチ」の「鞭打つ」意は既に希薄化していたと考えられる。

以上述べたことを整理すると、「ウチ越ゆ」の成立については次のような仮説が立てられるだろう。『万葉集』の「ウチ越ゆ」はCの段階であったと考えられる。

(34) 「ウチ越ゆ」の成立プロセス

A [(地名 ϕ /ヲ)] [馬ウチ] [越ゆ] (馬を鞭打って越える意)

〔「ウチ」が「鞭打つ」意を表していた段階〕

↓

B [(地名 ϕ /ヲ)] [ϕ ウチ] [越ゆ] ((馬を) 鞭打って越える意)

〔目的語「馬」が非表示となった段階〕

↓

C [(地名 ϕ /ヲ)] [ウチ越ゆ] ((馬で) 越える意)

〔「鞭打つ」意が失われ、「馬で越える」意の複合動詞となった段階〕

「ウチ出づ」「ウチ行く」「ウチ上る」「ウチ廻る」といった「ウチ越ゆ」以外の「ウチ+移動動詞」についても、本来は「ウチ」が「馬を鞭打つ」意を表していたものの、その意味が希薄化したものと考えて矛盾はない。しかし、全ての「ウチ+移動動詞」がそれぞれ独自に成立したものであるのか、あるいは特定の「ウチ+移動動詞」からの類推で成立したものはあるのかなど、それらの関係性については不明である。本稿では「ウチ越ゆ」の成立プロセスについての仮説を示したが、同様のプロセスが「ウチ行く」や「ウチ出づ」で起きた可能性もある。この点については、今後の課題としておきたい。

以上のように、「ウチ+移動動詞」においては、後項動詞の補語である移動の経路等は明示されるが、「ウチ」の目的語は存在しない。「ウチ」は本来的には「馬を鞭打つ」意を有していたと考えられるが、『万葉集』の「ウチ+移動動詞」においては、「ウチ」の「鞭打つ」意は失われていたと見られる。したがって、「ウチ+移動動詞」の前項「ウチ」も接頭辞と見てよいと思われる。

4.4 Ⅲ類の「ウチー」

「ウチ+非意志的自動詞」という構成であるⅢ類の「ウチー」には、前項が打撃を伴う動きを表しているものと、打撃を表さないものが存在する。

4.4.1 打撃を伴う動きを表す動詞を後項とするもの

次に挙げる「ウチ寄す」や「ウチ降る」は、前項が「寄す」「降る」に伴う非意志的な打

撃を表していると判断する。

- (35) なまよみの甲斐の国ウチ寄する（打縁流）駿河の国と
（万葉集・巻3・319・高橋虫麻呂）
- (36) 夏まけて咲きたるはねずひさかたの雨ウチ降らば（雨打零者）移ろひなむか
（万葉集・巻8・1485・大伴家持）

「ウチ寄す」は「駿河」にかかる枕詞として使用され、「波が打ち寄せる駿河」の意とされる⁸。上代には単独の「ウツ」が波を主体とする例は見られないが、波に関する「ウチー」は「ウチ寄す」のほかにも複数見られる。

- (37) 伏越ゆ行かましものをまもらふにウチ濡らさえぬ（所打沾）波数まずして
（万葉集・巻7・1387）
- (38) 大伴の御津の浜辺をウチ曝し（打曝）寄せ来る波のゆくへ知らずも
（万葉集・巻7・1151）

堀（1986）は「ウチ寄す」「ウチ濡らさゆ」などの「ウチ」について、「「波が～をうつ」の具体的な意味が著しく、単なる接頭語とすべきでない」（p.49）とする。「波」に関する「ウチー」として他に（38）のような「ウチ曝し（打曝）寄せ来る波」が2例ある。単独の「ウツ」が波を主体とする例は無いが、波が岸や浜に打ち寄せる際には強い接触（打撃）が生じること、波に関する「ウチー」が上代にも複数存在することから、これらの「ウチ」は「波が岸に打ち付ける」という非意志的な打撃を表すと見てよいだろう。

（36）の「ウチ降る」は、（9）（10）のように単独の「ウツ」に「霰が打ち付ける」意の用法が存在することから、前項「ウチ」が「雨が地面に打ち付ける」という非意志的な打撃を表していると見ておく。

4.4.2 打撃を伴わない動きを表す動詞を後項とするもの

打撃を伴う自然現象を表す「ウチー」がある一方、後項が打撃を伴う動きを表さない皿類の「ウチー」も見られる。

- (39) ウチ靡く（打奈婢久）春ともしるく鶯は植木の木間を鳴き渡らなむ
（万葉集・巻20・4495・大伴家持）
- (40) 明日香川瀬々の玉藻のウチ靡き（打靡）心は妹に寄りにけるかも
（万葉集・巻13・3267）
- (41) ウチ霧らし（打霧之）雪は降りつつしかすがに我家の苑に鶯鳴くも
（万葉集・巻8・1441・大伴家持）

「ウチ靡く」は上代に最も多く出現する「ウチー」であり、万葉集に31例確認できる。

⁸ 東遊歌や『古今集』には「波」を主体とする「ウチ寄す」の例が見られる。「河風のすゞしくもあるかウチ寄する浪とともにや秋はたつらむ」（古今集・170・紀貫之）など。

(27) に示した人が意志的に横になる様子を表すⅡ類としての用法だけでなく、(39) のような「春」にかかる枕詞としての用法、(40) のような「玉藻」「心」「黒髪」などの非情物が傾く様や横になる様を表す用法がある。これらの「ウチ靡く」は意志的な動きではないため、Ⅲ類に分類できる。上代には枕詞としての用法が多く見られ、このことが「ウチ靡く」の用例が際立って多いことの原因であると考えられる。枕詞としての「ウチ靡く」については、『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂）が「春になると草木がなよやかに靡くから、という」とするように、「草木がウチ靡く春」と解釈される。

Ⅱ類の「ウチ靡く」とⅢ類の「ウチ靡く」のいずれが先に成立したのか、という点も注目される。「ウチ靡く」の初出はⅡ類である(27)だが、この例のみが『万葉集』第2期のものである⁹。一方、Ⅲ類の「ウチ靡く」のうち、作歌年代の明らかなものはすべて第3期から第4期である。この事実から、Ⅱ類よりもⅢ類の成立が先である可能性が示唆されるが、第2期のⅡ類の例も1例のみであるため、断定はできない。いずれにせよ、目的語を伴う例が無いこと、打撃を伴う動作とは考えにくいことから、「ウチ靡く」の前項「ウチ」は接頭辞と判断できる。

「ウチ霧らす」は、「ウチ降る」と同じく天候に関する「ウチー」であるが、強い接触を伴わない。「ウチ靡く」と同様、「ウチ」は接頭辞である。

4.5 まとめ

以上、上代の「ウチー」について概観した。上代の「ウチー」の前項には、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類のいずれにおいても打撃を表す動詞として機能するものと接頭辞であるものの両者が併存していることが確認された。「前項が接頭辞である「ウチー」がⅠ類からⅢ類の全てにおいて認められる」「前項が明らかに接頭辞である「ウチ靡く」の用例数が突出して多い」といった事実は、上代において「ウチ」の接頭辞化が進行していたことを示すものである。接頭辞型複合動詞としての「ウチー」が上代から存在したことは明らかといえよう。

5 「トリー」との比較

阿部(2011)で述べられているように、上代の「トリー」のうち自動詞を後項とするものは「トリ来」「トリ付く(四段活用)」「トリ続く」「トリとどこほる」など意志的自動詞を後項とするものが少数存するのみであり、非意志的自動詞を後項とするものは確認できなかった。これに対し上代の「ウチー」は、他動詞、意志的自動詞、非意志的自動詞の全てを前項とする。この違いが生じた理由としてまず考えられるのは、前項となる動詞「トル」と「ウツ」の用法の差異である。「トル」は上代から手に関する動作を表す他動詞として使用される。これに対し「ウツ」は、他動詞としての用法が主であるが、「霰ウツ」のように自然現象を表す非意志的自動詞としての使用も確認できる。「トル」は他動詞としての使用のみであったのに対し、「ウチ」は非意志的自動詞としても使用されたことが、非意志的自動詞への前接可能性に差が生じた要因の1つではないだろうか。

また、かような差異が生じた要因として他に考えられるのは、接頭辞「トリ」と接頭辞「ウチ」の意味の希薄化の程度に差があった可能性である。すなわち、「トリ」は「手にす

⁹ 『万葉集』内の歌は次のように時期区分される。第1期：～壬申の乱(672年)、第2期：～平城京遷都(710年)、第3期：～山上憶良没(733年)、第4期：～天平宝字3年(759年)。

る」という本来の意味がわずかに残存していたため非意志的自動詞には接続できないが、「ウチ」は打撃の意味をほぼ完全に失っていたため様々な動詞に接続できた、という考え方である。ただ、「トリ」や「ウチ」が本来の意味をどの程度失っていたのかを明らかにするのは困難であるため、ここでは可能性の指摘にとどめておく。

6 今後の課題

本稿では、「ウツ」の連用形「ウチ」の接頭辞としての用法が上代において既に定着していたことを確認した。これは冒頭に挙げた(1a)に対する解答の一部を成すものである。しかし、動詞連用形が接頭辞化する現象は、「トリ」や「ウチ」だけでなく「カキ」「サシ」「ヒキ」などでも認められ、古代日本語における体系的な現象といえる。従って、「カキ」「サシ」「ヒキ」などの様相を検討することによって、(1a)についてより明確に答えることができるようになる。これについては今後の課題である。

また、本稿では接頭辞「ウチ」の意味については触れることができなかった。打撃と無関係な動詞に「ウチ」が積極的に付された理由を合理的に説明するには、接頭辞としての「ウチ」がどのような機能を有していたのかを解明することが欠かせないが、それを上代の様相から推定することは難しい。現時点では、近藤(1996、1997、1998ab、1999、2001)が中古の「ウチー」について主張している「弱意」に近いものであったと考えたい。近藤によれば、「弱意」は具体的な意味ではなく、それぞれの「ウチー」において具体化される抽象的な意味である。上代においても、前項が接頭辞と認められる「ウチー」が表わす動作は、「塩をつまんで糟湯酒をすする」((16)「ウチすするふ」)、「雪を梅の花かで見間違えてしまう」((17)「ウチ見る」)、「旅の途中で草を敷いて横になる」((24)「ウチ臥い伏す」)といったように、自ら積極的にを行うような動作ではない。これは近藤の主張する「弱意」と矛盾しない。しかし、打撃を表す「ウツ」から「弱意」が生じる理由は不明である。

接頭辞化のプロセスについても、本稿では触れることができなかった。動詞の接頭辞化は、内容語から機能語への変化であり、文法化の1例と考えることができる。「ウチ」が打撃の意味を失うことは文法化における「漂白化」、動詞としての機能を失うことは「脱範疇化」に当たる。従って、「ウチ」の接頭辞化プロセスを再分析や類推といった文法化の一般的なプロセスを用いて説明できる可能性がある。「ウチ」の接頭辞化は、前項が打撃を表していた「ウチー」の一部において、何らかの要因で前項の意味的な希薄化が起きて接頭辞「ウチ」が成立し、その結果「ウチ」の前接範囲が拡大して打撃と無関係な動詞にも付されるようになったものと考えられる。しかし、接頭辞化の契機となった「ウチー」がどのようなものであるか、意味的な希薄化を引き起こした要因は何であるのかなど、プロセスの詳細は明らかでない。「ウチ」は文献資料の最初期である上代において既に接頭辞化した例が見られることから、そのプロセスを文献によって辿ることは困難である。プロセスの解明は容易でない問題だが、「ウチ」の意味と同様に、今後の課題としておきたい。

使用テキスト

- ・万葉集…鶴久、森山隆編『万葉集』おうふう
- ・古事記、日本書紀、古今集…『日本古典文学大系』岩波書店
- ・源氏物語…『新日本古典文学大系』岩波書店

なお、表記は私に改めた。

参考文献

- 青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』pp.215-241 ひつじ書房
- 阿部裕(2011)「上代日本語の動詞接続「トリー」について—複合動詞の存否を中心に—」『Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)』5 pp.1-14 名古屋言語研究会
- 阿部裕(2013)「古代日本語における動詞接続「トリー」の様相」影山太郎編『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』pp.243-269 ひつじ書房
- 阿部裕(2016)「古代語における「打つ」を前項とする動詞接続「ウチー」の展開」『名古屋大学国語国文学』109 pp.65-80 名古屋大学国語国文学会
- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 伊藤博(1996)『萬葉集釋注 三』集英社
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 金田一春彦(1953)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』pp.329-354 三省堂
- 近藤明(1996)「「ウチワラフ」の意味の時代的变化—「ウチ動詞」の意味変化の一例—」『国語語彙史の研究 十六』pp.175-192 和泉書院
- 近藤明(1997)「中古における「ウチ+他動詞」の意味—源氏物語の場合—」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』pp.9-25 明治書院
- 近藤明(1998a)「「ウチカヘス」考—「ウチ」が接辞化しているものの場合—」『金沢大学教育学部紀要 人文科学・社会科学編』47:pp.9-18 金沢大学
- 近藤明(1998b)「中古における「ウチ+主体変化動詞」の意味—源氏物語の場合—」佐藤喜代治編『国語論究7 中古語の研究』pp.131-157 明治書院
- 近藤明(1999)「土井本太平記における「接頭辞ウチ+動詞」の意味」佐藤武義編『語彙・語法の新しい研究』pp.87-103 明治書院
- 近藤明(2001)「「ウチツヅク」考」『国語語彙史の研究 二十』pp.173-185 和泉書院
- 阪倉篤義(1983)「接頭語「うち」の消長」『国語語彙史の研究 四』pp.1-20 和泉書院
- 山王丸有紀(2011)「「接頭語」と解される「うち」について—源氏物語における「うち」を中心として—」『汲古』60:pp.49-55 古典研究会
- 関一雄(1993)『平安時代和文語の研究』笠間書院
- 堀勝博(1986)「「うちわたす」の考察」『ことばとことのは』3:pp.45-59 あめつち会 和泉書院
- 村田菜穂子・前川武(2013)「動詞由来の接頭辞についての通時的考察」『国語語彙史の研究 三十二』pp.135-147 和泉書院
- 吉澤典男(1952)「複合動詞について」『日本文学論究』10:pp.32-42 国学院大学文学会

付記 本稿は、日本語学会2012年度秋季大会(富山大学)で行った口頭発表の内容に加筆し、大幅な修正を加えたものである。発表に際してご意見・ご指導を賜った方々に深く感謝申し上げる。